

雨の日文庫・現代日本文学・大正編

生まれいずる悩み

有島武郎作

第6集5

第6集の内容

1	夢十夜	夏目漱石	11	瀬田氏の山荘	宮崎資夫
	変な音	夏目漱石	12	蔵の中	宇野浩二
	クレイク先生	夏目漱石	13	空中の芸当	小川未明
2	阿部一族	森鷗外		堤防を突破する波	小川未明
3	ある女の生涯	島崎藤村	14	新しき世界へ	上司小剣
4	十一月三日午後の事	志賀直哉		分業の村	上司小剣
	土地	武者小路実篤	15	牛部屋の臭い	正宗白鳥
5	生まれいずる悩み	有島武郎	16	或る少女の死まで	室生犀星
6	母親の通信	野上弥生子	17	少年の死	木下杢太郎
7	河童	芥川竜之介	18	赤毛の子	平沢計七
8	忠直卿行状記	菊地寛		或る機械	細井和喜蔵
9	トコヨゴヨミ	田山花袋		女工哀史抄	細井和喜蔵
	哀しき父	葛西善蔵	19	艦底	荒畑寒村
10	電車停留場	豊島与志雄		煤煙の臭い	宮地嘉六
	指	広津和郎	20	坑夫	宮島資夫
			21	解説	小田切秀雄

* 雨の日文庫 = 6 <現代日本文学・大正編>

* 昭和46年6月20日 印刷

* 昭和46年6月30日 発行

* 編集者 阿部知二・小田切秀雄・佐々木基一・国分一太郎

* 発行者 布村哲夫

* 発行所 東京都文京区関口3-2-1 有限会社 麥書房

TEL (947) 530 振替東京 27913

* 印刷所 船舶印刷株式会社・株式会社耕進舎印刷所

* 製本所 三浦製本所・加藤紙器

* 装丁者 栗津潔

内部交流

S 72/70 (H 7 - 3 / 24)

出生の煩悩

B000075



有島武郎作・絵久米宏一

生まれいずる悩み

雨の日文庫第六集 Ⅱ

生まれいずる悩み



一

私は自分の仕事を神聖なものにしようとしていた。ねじ曲がろうとする自分の心をひっぱたいて、できるだけ伸び伸びしたまっすぐな明るい世界に出て、そこに自分の芸術の宮殿を築き上げようともがいていた。それは私にとってどれほど喜ばしい事だったろう。と同時にどれほど苦しい事だったろう。私の心の奥底には確かに——すべての人の心の奥底にあるのと同様な

有 島 武 郎

——火が燃えてはいたけれども、その火を燐^{りん}らそうとする塵芥^{ちんがい}の堆積^{たいせき}はまたひどいものだった。かきのけてもかきのけても容易に火の燃え立って来ないような瞬間には私はみじめだった。私は、机の向こうに開かれた窓から、冬が来て雪にうずもれて行く一面の畑を見渡しながら、^{とどろ}滞り^{とどろ}がちな筆をしかりつけしかりつけ運ばそうとしていた。

寒い。原稿紙の手ざわりは氷のようだった。

陽^ひはずんずん暮れて行くのだった。灰色からねずみ色に、ねずみ色から墨色にぼかされた大きな紙を目の前にかけて、上から下へと一気に視線を落として行く

時に感ずるような速さで、昼の光は夜の闇に変わって行こうとしていた。午後になったと思うまもなく、どんどん暮れかかる北海道の冬を知らないものには、日がいち早く蝕まれるこの気味悪いさびしさは想像がつくまい。ニセコアンの丘陵の裂け目からまっしぐらにこの高原の畑地を目がけて吹きおろして来る風は、割合に粒の大きい軽やかな初冬の雪片をおおりに立て横ざまに舞い飛ばした。雪片は暮れ残った光の迷子のように、ちかちかした印象を見る人の目に与えながら、いたずら者らしくさんさん飛び回った元氣にも似ず、降りたまった積雪の上に落ちるや否や、寒い薄紫の死を死んでしまう。ただ窓に来てあたる雪片だけがさらさらさらさとささやかに音を立てるばかりで、他のすべてのやつらは残らず啞だ。快活らしい白い啞の群れの舞踏——それは見る人を涙ぐませる。私はさびしさのあまり筆をとめて窓の外をながめてみた。そして君の事を思った。

私が君に初めて会ったのは、私がまだ札幌に住んでいるころだった。私の借りた家は札幌の町はずれを流れる豊平川という川の右岸にあった。その家は堤の下の一町歩ほどもある大きなりんご園の中に建ててあった。

そこにある日の午後君は尋ねて来たのだった。君は少しふきげんそうな、口の重い、癪で背だけが伸び切らないといったような少年だった。きたない中学校の制服の立て襟のホックをうるさそうにはずしたままにしていた、それが妙な事にはことには、つきりと私の記憶に残っている。

君は座につくとぶっさばうに自分のかいた絵を見てもらいたいと言いだした。君は片手ではかかえ切れないほど油絵や水彩画を持ちこんで来ていた。君は自分自身を平気で虐げる人のように、ふろしき包みの中

から乱暴に幾枚かの絵を引き抜いて私の前に置いた。そしてじつと探るように私の顔を見つめた。明らかに言うところ、その時私は君をいやに高慢ちきな若者だと思った。そして君のほうには顔も向けなくて、よんどころなくさし出された絵を取り上げて見た。

私は一目見て驚かずにはいられなかった。少しの修練も経てはいないし幼稚な技巧ではあったけれども、その中には不思議に力がこもっていてそれがすぐ私を襲ったからだ。私は画面から目を放してもう一度君を見直さなくてはいられなくなった。で、そうした。その時、君は不安らしいそのくせ意地っぱりな目つきをして、やはり私を見つけていた。

「どうでしょう。それなんかはくだらない出来だけども。」

そう君はいかにも自分の仕事を軽蔑するように言った。もう一度明らかに言うが、私は一方で君の絵に喜ばしい驚きを感じながらも、いかにも思いあがった

ような君の物腰には一種の反感を覚えて、ちょっと皮肉でも言ってみたくになった。「くだらない出来がこれほどなら、会心の作というのはたいしたものでしょうね」とかなんとか。

しかし私は幸いにもとっさにそんな言葉で自分を穢すことをのがれたのだった。それは私の心が美しかったからではない。君の絵がなんといっても君自身に對する私の反感に打ち勝って私に迫っていたからだ。

君がその時持つて来た絵の中で今でも私の心の底にまざまざと残っている一枚がある。それは八号の風景にかかれたもので、輕川あたりの泥炭地を写したと覺しい晩秋の風景画だった。荒涼と見渡す限りに連なった地平線の低い葦原を一面におおうた雲のすきまから午後目の目がかすかに漏れて、それが、草の中からたった二本ひよろひよろと生い伸びた白樺の白い樹皮を力強く照らしていた。単色を含んで来た筆の穂が不器用に画布にたたきつけられて、そのままけし飛んだよ

うな手荒な筆触で、自然の中には決して存在しないと
言われる純白の色さえ他の色と練り合わされずに、そ
のままべとりとなすり付けてあったりしたが、それで
もじつと見ていると、そこには作者の鋭敏な色感が存
分にうかがわれた。そればかりか、その絵が与える全
体の効果にもしつかりとまとまった気分が行き渡って
いた。悵鬱——十六七の少年には咄め（はぐ）でもない重い
悵鬱を、見る者はすぐ感ずる事ができた。

「たいへんいいじゃありませんか。」

絵に対して素直（すなお）になった私の心は、私にこう言わさ
ないではおかなかった。

それを聞くと君は心持ち顔を赤くした——と私は思
った。すぐ次の瞬間に來ると、君はしかし私を疑うよ
うな、自分を冷笑（あざわら）うような冷ややかな表情をして、し
ばらくの間私と絵とを等分に見くらべていたが、ふい
と庭のほうへ顔をそむけてしまった。それは人をばか
にした仕打ちとも思えば思われない事はなかった。二

人は氣まずく黙りこくってしまった。私は所在なさに
黙ったまま絵をながめつづけていた。

「そいつはどこん所が悪いんです。」

突然また君の無愛想な声がした。私は今までの妙に
ちぐはぐになった気分から、ちよつと自分の意見をず
ばずばと言ひ出す氣にはなれないでいた。しかし改め
て君の顔を見ると、言わさないじゃおかないぞといっ
たような真剣さが現われていた。少しでもまに合わせ
を言おうものなら輕蔑（けいべつ）してやるぞといったような鋭さ
が見えた。よし、それじゃ存分に言つてやろうと私も
とうとうほんとうに腰をすえてかかるようにされてい
た。

その時私が口に任せてどんな生意氣を言ったかは幸
いな事に今はおおかた忘れてしまっている。しかしと
にかく悪口としては技巧が非常にあぶなっかしい事、
自然の見方が不親切な事、モティヴが耽情的（たんじやうてき）過ぎる事
などをならべたに違いない。君は黙ったまままじまじ

と目を光らせながら、私の言う事を聞いていた。私が言いたい事だけをあげ、すけに言ってしまうと、君はしばらく黙りつづけていたが、やがて口のすみだけに始めて笑いらしいものを漏らした。それがまた普通の微笑とも皮肉な揶揄とも思いなされた。

それから二人はまた二十分ほど黙ったままで向かい合つてすわりつづけた。

「じゃまた持つて来ますから見てください。今度はもっといいものをかいて来ます。」

その沈黙のあとで、君が腰を浮かせながら言ったこれだけの言葉はまた僕を驚かせた。まるで別な、初な、素直な子供でもいったような無邪気な明るい声だったから。

不思議なものは人の心の働きた。この声一つだった。この声一つが君と私とを堅く結びつけてしまったのだった。私は結局君をいろいろに邪推した事を悔いながらやさしく尋ねた。

「君は学校はどこです。」

「東京です。」

「東京？ それじゃもう始まっているんじゃないか。」

「ええ。」

「なぜ帰らないんです。」

「どうしても落第点しか取れない学科があるんでいやになったんです。……それから少し都合もあつて。」

「君は絵をやる気なんですか。」

「やれるでしょうか。」

そう言った時、君はまた前と同様な強情らしい、人に迫るような顔つきになった。

私もそれに対してなんと答えようもなかった。専門家でもない私が、五六枚の絵を見ただけで、その少年の未来の運命全体をどうして大胆にも決定的に言い切る事ができよう。少年の思い入ったような態度を見るにつけ、私にはすべてが恐ろしかった。私は黙っていた。

「僕はそのうち郷里に——郷里は岩内です——帰りま
す。岩内のそばに硫黄を掘り出してゐる所があるん
です。その景色を僕は夢にまで見ます。その絵を作り上
げて送りますから見てください。……絵が好きなんだ
けれども、下手だからだめです。」

私の答えないのを見て、君は自分をたしなめるよう
に堅いさびしい調子でこう言った。そして、私の目の
前に取り出した何枚かの作品をめちゃくちゃにぶろし
きに包みこんで帰って行ってしまった。

君を木戸の所まで送り出してから、私はひとりで手
広いりんご畑の中を歩きまわった。りんごの枝は熟し
た果実でたわわになっていた。ある木などは葉がすっ
かり散り尽くして、赤々とした果実だけが真裸で累々
と日にさらされていた。それは快く空の晴れ渡った小
春びよりの一日だった。私の庭下駄に踏まれた落ち葉
はかわいた音をたてて微塵に押しひしがれた。豊満
のさびしさというようなのが空気の中にしんみりと

漂っていた。ちょうどそのころは、私も生活のある一
つの岐路に立って疑い迷っていた時だった。私は冬を
目の前に控えた自然の前に幾度も知らず知らず棒立ち
になって、君の事と自分の事とをまぜこぜに考えた。
ふとにかく君は妙に力強い印象を私に残して、私から
姿を消してしまつたのだ。

その後君からは一度か二度問い合わせか何かの手紙
が来たきりでばつたり、消息が途絶えてしまつた。岩内
から来たという人などに尋うと、私はよくその港にこ
ういう名前の青年はいないか、その人を知らないかな
ぞと尋ねてみたが、さらに手がかりは得られなかつ
た。硫黄採掘場の風景画もとうとう私の手もとには届
いて来なかつた。

こうして二年三年と月日がたつた。そしてどうかし
た拍子に君の事を思い出すと、私は人生の旅路のさび
しさを味わつた。一度とにかく顔を合せて、ある程
度まで心を触れ合つたところが、いったん別れたが最

後、同じこの地球の上に呼吸しながら、未来永劫とこ永久またと邂逅めくりあわない……それはなんとという不思議な、さびしい、恐ろしい事だ。人とは言うまい、犬でも、花でも、塵ちりとでもだ。孤独に親しみやすいくせにどこか殉情的で人なつっこい私の心は、どうかした拍子に、このやむを得ない人間の運命をしみじみと感じて深い慇懃こころづに襲われる。君も多くの人の中で私にそんな気持ちを起こさせる一人だった。

しかも浅はかな私は人間は猿さると同様に物忘れする。四年五年という歳月は君の記憶を私の心からきれいにぬぐい取ってしまおうとしていたのだ。君はだんだん私の意識の隅すみを踏み越えて、潜在意識の奥底に隠れてしまおうとしていたのだ。

この短からぬ時間は私の身の上にも私相当の変化をひき起こしていた。私は足かけ八年住み慣れた札幌——ごく手短かに言っても、そこで私の上にもいろいろな出来事がわき上がった。妻も迎えた。三人の子の父

ともなった。長い間の信仰から離れて教会とも縁を切った。それまでやっていた仕事にだんだん失望を感じ始めた。新しい生活の芽が周囲の拒絶をも無なみして、そろそろと芽ぐみかけていた。私の目の前の生活の道にはおぼろげながら気味悪い不幸の雲がおおいかわるうとしていた。私は始終私自身の力を信じていいのか疑わねばならぬかの二筋道に迷いぬいた——を去って私には物足らない都会生活が始まった。そして、目にあまる不幸がつぎつぎに足もとからまくし上がるのを手をこまねいてじつとながめねばならなかった。心の中に起こったそんな危機の中で、私は捨て身になって、見も知らぬ新しい世界に乗り出す事を余儀なくされた。それは文学者としての生活だった。私は今度こそはまったくひとりで歩かねばならぬと決心の臍はらを堅めた。またこの道に踏み込んだ以上は、できてもできなくても人類の意志と取り組む覚悟をしなければならなかった。私は始終自分の力量に疑いを感じ通しながら

ら原稿紙に臨んだ。人々が寝入って後、草木も寝入って後、ひとり目ざめてしんとした夜の寂寞の中に、万年筆のペン先が紙にきしり込む音だけを聞きながら、私は神がかりのように夢中になって筆を運びしている事もあった。私の周囲には亡霊のような魂がひしめいて、紙の中に生まれ出ようと苦しみあせっているのを、つきりと感じた事もあった。そんな時気がついてみると、私の目は感激の涙に漂っていた。芸術におぼれたものでなくて、そういう時のエクスタシーをだれが味わい得よう。しかし私の心が痛ましく裂け乱れて、純一な気持がどこのすみにも見つけられない時のさびしさはまたなんと喻えようもない。その時私は全く一塊の物質に過ぎない。私にはなんにも残されない。私は自分の文学者である事を疑ってしまう。文学者が文学者である事を疑うほど、世に空虚なたよりないものがまたとあろうか。そういう時に彼は明らかに生命から見放されてしまっているのだ。こんな瞬間に

限っていつでもきまったように私の念頭に浮かぶのは君のあの時の面影だった。自分を信じていいのかわいのかを決しかねて、たくましい意志と冷冽な批評とが互いに裏に戦って、思わず知らずすべてのものに向かって敵意を含んだ君のあの面影だった。私は筆を捨てて椅子から立ち上がり、部屋の中を歩き回りながら、自分につぶやくように言った。

「あの少年はどうなったろう。道を踏み迷わないでいてくれ。自分を誇大して取り返しをつかない死出の旅をしないでいてくれ。もし彼に独自の道を切り開いて行く天稟がないのなら、どうか正直な勤勉な凡人として一生を終わってくれ。もうこの苦しみはおれ一人だけでたくさんだ。」

ところが去年の十月——と言えば、川岸の家で偶然君というものを知ってからちょうど十年目だ——のある日雨のしよぼしよぼと降っている午後一封の小包が私の手もとに届いた。女中がそれを持って来た時、

私は干し魚が送られたと思ったほど部屋の中が生臭く
 なった。包みの油紙は雨水と泥とでひどくよごれてい
 て、差出人の名前がようやくの事で読めるくらいだっ
 たが、そこにしるされた姓名を私はだれともはつきり
 思い出すことができなかった。ともかくも思つて私
 はナイフでがんにような液びきの麻糸を切りほごしに
 かつた。油紙を皮めくるとその中にまた麻糸で堅
 く結わえた油紙の包みがあつた。それをほごすとまた
 油紙で包んであつた。ちよつと腹の立つほど念の入つ
 た包み方で、百合の根をはがすように一枚一枚むいて
 行くと、ようやく幾枚もの新聞紙の中から、手あかで
 よごれ切つた手製のスケッチ帳が三冊、きりきりと棒
 のように巻き上げられたのが出て来た。私は小氣味悪
 い魚のにおいを始終気にしながらその手帳を広げて見
 た。

それはどれも鉛筆で描かれたスケッチ帳だつた。そ
 してどれにも山と樹木ばかりが描かれてあつた。私は

一目見ると、それが明らかに北海道の風景である事を
 知つた。のみならず、それは明らかにほんとうの芸術
 家のみが見うる、そして描きうる深刻な自然の肖像画
 だつた。

「やつつけたな！」咄嗟に私は少年のままの君の面影
 を心いっぱいに描きながら下くちびるをかみしめた。
 そして思わずほへんだ。白状するが、それがもし小
 説か戯曲であつたら、その時の私の顔には微笑の代わ
 りに苦い嫉妬の色が濃くみなぎっていたかもしれない。

その晩になつて一封の手紙が君から届いて来た。や
 はり厚い画学紙にすり切れた筆で乱雑にこう走り書き
 がしてあつた。

「北海道ハ秋モ晩クナリマシタ。野原ハ、毎日ノヨ
 ウニツメタイ風ガ吹イテイマス。

日ゴロ愛惜シタ樹木ヤ草花ナドガ、イツトハナク落
 葉シテシマツテイル。秋ハ人ノ心ニイロイロナ事ヲ

思ワセマス。

日ニヨリマストアタリノ山々が浮キアガツタカト思
ワレルクライ空が美シイ時ガアリマス。シカシタイ
テイハ風トイツショニ雨ガバラバラヤツテ来テ道ヲ
悪クシテイルノデス。

昨日スケッチ帳ヲ三冊送リマシタ。イツカあなたニ
絵ヲ見テモライマシテカラ、故郷デ貧乏漁夫デアル
私ハ、毎日忙シイ仕事ト激シイ労働ニ追ワレテイル
ノデ、ツイコトシマデ絵ヲカイテミタカッタノデス
ガ、ツイカケナカッタノデス。

コトシノ七月カラ始メテ画用紙ヲトジテ画帖ガクホウヲ作
リ、鉛筆デ(モノ)ニ向カツテミマシタ。シカシ勞
働ニ害サレタ手ハ思ウヨウニ自分ノ感力ヲ現ワス事
ガデキナイデ困リマス。

コンナツマラナイ素描帳ヲ見テクダサイト言ウノハ
タイヘンツライノデス。シカシ私ハイツワラナイデ
始メタ時カラノヲ全部送リマシタ。(中略)

私ノ町ノ知的素養ノイクブンナリトモアル青年デ
モ、自分トイウモノニツイテ思イヲメグラス人ハ少
ナイヨウデス。青年ノ多クハ小サクサカシクオサマ
ツテイルモノカ、ツマラナク時ヲ無為ニ送ツテイマ
ス。デスガ私ハ私ノ故郷ダカラ好キデス。

イロイロナモノガ私ノ心ヲオドラセマス。私ノスケ
ッチニ取ルベキトコロノアルモノガアルデシヨウ
カ。

私ハナントナクコンナツマラスモノヲあなたニ見テ
モラウノガハズカシイノデス。

山ハ絵ノ具ヲドツシリ付ケテ、山ガ地上カラ空ヘモ
レアガツテイルヨウニカイテミタイモノダト思ッテ
イマス。私ノスケッチデハ私ノ感じガドウモ出ナイ
デコマリマス。私ノ山ハ私ガ實際ニ感じルヨリモア
マリ平面ノヨウデス。樹木モドウモ物体感ニトボシ
ク思ワレマス。

色ヲツケテミタラヨカロウト考エテイマスガ、時間

ト金ガナイノデ、コンナモノデ腹イセヲシテイルノ
デス。

私ハイロイロナ構圖デ頭ガイッパイニナッテイルノ
デスガ、ナニシロマダカクダケノ腕ガナイヨウデ
ス。オ忙シイあなたニコンナ無遠リヨロカケタイ
ヘンスマナク思ッテイマス。イツカオヒマガアッタ
ラ御教示ヲ願イマス。

十月末

こう思ったままを書きなぐった手紙がどれほど私を
動かしただか。君にはちよつと想像がつくまい。自分が
文学者であるだけに、私は他人の書いた文字の中にも
真実と虚偽とを直感するかなり鋭い能力が発達してい
る。私は君の手紙を読んでいるうちに涙ぐんでしまっ
た。魚臭い油紙と、立派な芸術品であるスケッチ帳
と、君の文字との間には一分のすきもなかった。「感
力」という君の造語は立派な内容を持つ言葉として私
の胸に響いた。「山ハ絵ノ具ヲドッシリ付ケテ、山ガ

地上カラ空ヘモレアガッテイルヨウニカイテミタイ」
……山が地上から空にもれあがる……それはすばらし
い自然への肉迫を表現した言葉だ。言葉の中にしみ渡
ったこの力は、軽く対象を見て過ごす微温な心の、ま
ねにも生み出し得ない調子を持った言葉だ。

「だれも気もつかず注意も払わない地球のすみっこ
で、尊い一つの魂が母胎を破り出ようとして苦しんで
いる。」

私はそう思ったのだ。そう思うとこの地球というも
のが急により美しいものに感じられたのだ。そう感ず
るとなんとなく涙ぐんでしまったのだ。

そのころ私は北海道行きを計画していたが、雑用に
紛れて躊躇するうちに寒くなりかけたので、もういっ
そやめようかと思つていたところだった。しかし君の
スケッチ帳と手紙を見ると、ぜひ君に会つてみたくな
って、一徹にすぐ旅行の準備にかかった。その日から
一週間とたたない十一月の五日には、もう上野駅か

ら青森への直行列車に乗っている私自身を見いだした。

札幌での用事を済まして農場に行く前に、私は岩内にあてて君に手紙を出しておいた。農場からはそう遠くもないから、来られるなら来ないか、なるべくならお目にかかりたいからと言って。

農場に着いた日には君は見えなかった。その翌日は朝から雪が降りだした。私は窓の所へ机を持って行って、原稿紙に向かって呻吟しんげんしながら心待ちに君を待つのだった。そして涙りがちな筆を休ませる間に、今まで書き遅ねて来たような過去の回想やら当面の期待やらをつぎつぎに脳裏に浮かばしていたのだった。

三

夕やみはだんだん深まって行った。事務所をあずかる男が、ランプを持って来たついでに、夜食の膳ぜんを運ぼうかと尋ねたが、私はひょっとすると君が来はしな

いかという心づかいから、わざとそのままにしておいてもらって、またかじりつくように原稿紙に向かった。大きな男の姿が部屋からのつそりと消えて行くのを、視覚のはずれに感じて、都会から久しぶりで来て見ると、物でも人でも大きくゆったりしているのに今さらながら一種の圧迫をさえ感ずるのだった。

涙りがちな筆がいくらもはかどらないうちに、夕やみはどんどん夜の暗さに代わって、窓ガラスのむこうは雪と闇やみとのぼんやりした明暗キヤロスキエロになってしまった。

自然は何かに気を障さえだしたように、夜とともに荒れ始めていた。底力のこもった鈍い空気が、音もなく重苦しく家の外壁に肩をあてがってうんともたれかかるのが、畳の上にすわっていてもなんとなく感じられた。自然が粉雪をあおりたてて、所きらわずたたきつけながら、のたうち回ってうめき叫ぶその物すごい気配けいはもう迫っていた。私は窓ガラスに白もめんのカーテンを引いた。自然の暴威をせき止めるために人間が

苦心して創り上げたこのみじめな家屋という領土が、ろく小さく私の周囲にながめやられた。

突然、ど、ど、ど……という音が——運動が（そういう場合、音と運動との区別はない）天地に起こった。さあ始まったと私は二つに折った背中を思わず立て直した。同時に自然は上歯を下くちびるにあてがって思いきり長く息を吹いた。家がぐらぐらと揺れた。

地面からおどりがった雪が二三度はずみを取って置いて、どっと一気に天に向かって、謀反でもするよう、降りかかって行くあの悲壮な光景が、まざまざと部屋の中にすくんでいる私の想像に浮かべられた。だめだ。待ったところがもう君は来やしない。停車場からの雪道はもうとうに埋まってしまったに違いないから。私は吹雪の底にひたりながら、物さびしくそう思つて、また机の上に目を落とした。

筆はますます渋るばかりだった。軽い陣痛のようなものは時々起こりはしたが、大切な文字は生まれ出て

くれなかった。こうして私にとって情けないもどかしい時間が三十分も過ぎたころだったろう。農場の男がまたのそりと部屋にはいつて来て客来を知らせたのは。私の喜びを君は想像する事ができる。やはり来てくれたのだ。私はすぐに立って事務室のほうへかけつけた。事務室の障子をあけて、二畳敷きほどもある大囲炉裏の切られた台所に出て見ると、その土間に、一人の男がまだ靴も脱がずに突っ立っていた。農場の男も、その男にふさわしく肥って大きな内儀さんも、普通な背たけにしか見えないほどその客という男は大きかった。言葉どおりの巨人だ。頭からすっぽりと頭布のついた黒っぽい外套を着て、雪まみれになって、口から白い息をむらむらと吐き出すその姿は、実際人間という感じを起こさせないほどだった。子供までがおびえた目つきをして内儀さんのひざの上に丸まりながら、その男をうろろらしく見詰めていた。

君ではなかったなと思うと僕は期待に裏切られた失